



■ If I teach again, I will pay a special attention on the poorest scholar in the class.
If I could do that, I believe, I can be a successful teacher.

“A Best Method of Teaching”というタイトルを付された標記の言葉は、新島が二回目の欧米旅行中、静養のために滞在したニューヨーククリフトン・スプリングスで書いた日記の一節である。同日の日記には“A Policy for our Training school”と題された文章も記されていて、新島はここでのひと時、同志社教育とそこで働く教師のあるべき姿について思いを巡らせたに違いない。

なぜ新島はこんなことを書いたのか。もしかすると新島にも the poorest scholar であつた時期があり、それはフィリップス・アカデミー時代ではなかつたかと想像するのである。新島が在学中に書いた英文には、日本にいる父・民治への伝言という設定で “Be not concern for me; I have found very good friends, who love me for conscience sake.” とある。渡米後最初の学校で相当苦労したであろう新島を支えたのは、教師を含めた周囲の人々の粘り強い指導と励ましであつた。“for conscience sake” を「良心のゆえに」と訳すならば、良心教育を最初に受けたのは新島その人であつたと言えようか。

時に「この生徒さえいなければうまくいくのに」「あの生徒のせいで思うように進まない」と思う私にとって、新島の言葉は自分の姿を映す鏡のような役割を果たしている。襟を正さざるを得ない。



Doshisha college song

Words by W. M. Vories Music by Carl Wilhelm

One purpose, Doshisha, thy name
Doth signify; one lofty aim:
To train thy sons in heart and hand
To live for God and Native Land.
Dear Alma Mater, sons of thine
Shall be as branches to the vine;
Tho' through the world we wander far and wide,
Still in our hearts thy precepts shall abide!

同志社よ、その名は一つの目的を意味する。

その学徒の精神的、肉体的に、

神のため、祖国のため、生きんという

一つの崇高な目的を。

親愛なる母校よ、同志社の学徒は、

ぶどうの枝のごとくつながりゆくことであろう。

たとえ、世界くまなく、広くはるかに、

われらさまようとも、汝の教訓は、

われわれの心に永遠に生き続けるであろう。

(訳：児玉 実英)